

## 「シベリア抑留の回想」

鳥取県 山本澄子

(旧姓金森)

昭和二十年八月九日未明、突如大音響とともに師団司令部前庭に爆弾投下、日ソ開戦となりました。三江省佳木斯第一陸軍病院では、速やかに入院患者の後送を終わり、八月十三日野戦病院開設のため、三江省方正に転進しました。我々看護婦女子隊百五十名は最限度の荷物をまとめ、白衣を脱ぎ軍服・軍靴・垂れ付きの帽子（髪はオカッパ）で女の兵隊ができました。

八月十七日全員広場に集合し、長谷川部隊長から終戦（敗戦）を知らされ、ただ驚きでしばらくは茫然自失の状態でした。友と手を取り合ってただ泣くのみでした。この時の光景は生涯忘れることはできません。

八月二十日ごろソ連軍の捕虜となり、行く先も知らされないまま行軍、着いたのは伊関通の港でした。前列にいた衛生兵と女子五名が乗船したところで打ち切

られ、夕闇迫る港に奥田軍医と残りの女子隊が取り残されました。

その後、軍医の指揮で六キロの今来た道を引き返すため、四列縦隊で真っ暗な道を無言のまま急ぎました。突然前方にジープが現れ、ライトの中にソ連兵がマントを翻し立っているのが見えました。一瞬巨大な蝙蝠かと思いました。

直後、全員が蜘蛛の子を散らすように逃げました。「婦長殿助けてー」の声を残して一人拉致されたのです。五十年経過した今、なおその当時のことが走馬灯のように思い出されます。

当初、病院長より女子全員に「青酸カリ」の小びんを渡され、「いざというときには大和撫子らしく深く身を処するよう」と言われ、常に胸のポケットに大事に入れていました。拉致された上田房枝さん（十七歳）は、うら若き命を処したのでしょうか。消息不明のまま五十年が過ぎました。やっとの思いで方正に到着し、幕舎に落ち着きました。

九月末に移動のため乗船し、到着したのがハバロフ

スクの将校収容所でした。河畔の林間学校跡の建物で、ここでは十日間ぐらい何事もなく経過しました。十月十日女子のみ移動命令が下り、ソ連兵の「ダモイ東京」の甘言に、もしや帰国できるのではと一生懸命歩き続けました。なんと十時間ぐらい歩いたと記憶しています。途中休憩のたびごとに私物検査があり、時計、万年筆等めばしい品物をほとんど強奪され、くやしい行軍でした。夜半着いたのが、ハバロフスク第十分所でした。第一中隊は軍人、第二中隊は義勇隊の少年たち、第三中隊が女子隊でした。翌日我々女子の大軍に驚き、収容所は大騒ぎしたそうです。

ここでの作業は男子は山へ石切り、女子は薪取りです。全中隊がベチカで使用する燃料です。極寒の山で、しかも雪中下の薪を探し、これを背負いソ連兵にダワイダワイと駆り立てられ、トボトボ歩く姿は惨めで、改めて敗戦を身を持って感じました。

またコルホーズでの作業では、気の遠くなりそうな広大な畝の草取り、ジャガイモ掘りと町育ちの私にはつらく、岡山出身の農家育ちの友人に大半は助けても

らい感謝したものです。

作業中畑で食べたゆでたてのおいものは、天下第一品で今でも忘れません。途中から厨房作業に移り、ここでは寒くはなく、空腹もなく、兵隊さんたちも親切だったので、笑顔も出る毎日でした。収容所は有刺鉄線で囲まれ、四隅の望楼には歩哨が銃を構え、夜は光の矢が走り嚴重でした。冬の日には義勇隊の少年二人が逃亡に失敗して銃殺された痛ましい事件もありました。二十一年春ごろから女子の分散が始まり、九月三日、六人の仲間と一緒に十分所に別れを告げることになりました。トラックで移動し、到着したところがベリヤスフク病院でした。半分地下室のある建物が二棟あり、内科・外科にわかれ、私は内科勤務となりました。患者の大半が栄養失調で、夜元氣だったのに翌朝は冷たくなって、遠い異国の地で一人淋しく天国に召されて行く若者が毎日のように続き、それはつらい悲しい思いをしました。

病院長はソ連の軍医大佐（女性）で背が低く、太ったどことなく威厳のある人でした。他に若くて美人の

軍医中尉とセストラ三名、我々三名が内科でした。

外科は男性のソ連軍医、看護婦は内科と同数でした。患者で全快した人が二名通訳、現地の娘さんが掃除、雑用係として二名、以上のメンバーで帰国までの一年間は本来の仕事なので苦にならず、軍医も個人的には大変優しく、我々看護婦を大変大切に扱ってくれました。

夜勤明けは自由で、何をしてもなく、風呂も週三回あり、これが一番うれしいことでした。

二十二年六月二十日、軍医大佐から帰国を知らされ、今度こそ本当に帰国できるんだ、本当だろうか。出発のとき女医が、娘がズボンではおかしいからと、自分の軍服のワンピースを私にだけくださった。大切に持って帰りました。幸いにも抑留生活の後半は恵まれていたように思います。

病院に別れを告げて、ナホトカに集結、婦長を初めとして、別れ別れになっていた友人と再会し、涙の対面もありました。六月二十五日「栄豊丸」に乗船し、いよいよシベリアとも別れを告げ、一路祖国を目指し

ました。

ただ感無量でした。二十八日、夢に見た日本内地の島影が見えたときの感激、皆が甲板に上がり歓声が上がりました。しっかりと東舞鶴の土を踏みしめました。検疫、MPの検査手続きを終えて、七月三日、米子市に復員することができました。

## 異国の浦島太郎

高知県 山本 弘

昭和二十年、私は満州延吉の憲兵隊本部にいた。

八月十二日、関東軍第三軍司令官閣下の身边護衛を、山口軍曹と私の二人がおおせつかった。

十五日、北鮮の羅津、清津がソ連軍の爆撃をうけているという情報をきいて、軍司令官と一緒に視察に行った途中、ドンドン敗走する将兵に出会った。また爆薬や被服庫が爆撃されて燃えている。とにかく全車輜を動員して被服を延吉へ運送せよと命令していると